

学位論文審査及び最終試験報告書

学位申請者氏名	留守 孝子		学籍番号	1142202		
申請学位 (専攻分野)	博士 (学術)		専攻	総合生活		
論文題目	居宅療養高齢者の摂食機能に適応する食物形態区分を用いた 栄養指導方法に関する研究					
成績	論文審査及び最終試験			合格		
学位論文 審査委員		氏名	職名		氏名	職名
	主査	坂本 洋一	教授	審査 委員	宮本 佳代子	准教授
	審査 委員	中島 明子	教授		山中 崇	准教授
		古畑 公	教授			
		松本 光	医師・副院長			

論文審査の要旨

本論文は「居宅療養高齢者の摂食機能に適応する食物形態区分を用いた栄養指導方法に関する研究」と題し、6章から構成されている。

第I章では、論文の背景と目的を示した。わが国の高齢化社会の中で介護の第一線となるのは、ケアマネジャーやヘルパーであるが、食生活面においての知識など、管理栄養士からの教授が必要な場合が多い。要介護高齢者の摂食機能に適応した食物形態の基準について、既に要介護高齢者施設においては先行研究が進んでおり、食物形態区分がある程度確立されてきている。一方居宅での対応については、ヘルパーや家族が手探りで調整しており、十分に確立されていないのが現状である。以上のことより、居宅介護の現場でも食物形態区分の基準を作成し、食物形態の種類と適応について、介入研究により検討した。

第II章「居宅療養高齢者に対する介護サービス事業者からみた食事に関する課題と管理栄養士・栄養士の認識との比較に関する検討」では、居宅療養高齢者のケア・マネジメントの中で摂食機能低下が及ぼす食事の課題について、介護サービス事業者と管理栄養士・栄養士、両者の課題把握にずれがないかを解析した。その結果管理栄養士・栄養士の把握では、介護サービス事業者に比べ、咀嚼機能の低下に捉われやすい傾向がみられた。管理栄養士・栄養士の特に知識を高めたい分野は、『摂食機能に合わせた食物形態』ではなく、『治療食についての知識』であった。訪問栄養指導に携わっている管理栄養士・栄養士が未だ少なく、現場への認識やニーズ把握がしにくい状況にあると考えられた。

第III章「居宅高齢者の食品摂取状況および調理方法の現状把握」では高齢者の食生活の実態を把握し、高齢者に対して家庭でより実践しやすいものとなるよう、栄養教育のあり方について検討することを目的とし検討を行った。その結果年齢が高いほど食べやすい食品を、高齢者世帯ほど調理しやすい食品を選択していることが明らかとなった。調理方法については、「焼く」「炒める」といった単調な調理方法を選択していた。

第IV章「居宅療養高齢者の摂食機能に合わせた食物形態区分についての検討」では、第III章で得られた高齢者がよく使用する食材、調理方法を用いた調理品 117 サンプルに対して、「硬さ」「付着性」「弾力性」「凝集性」の物性測定を行って、食物形態区分の検討をした。介護者の調理負担の軽減及び要介護高齢者の意思尊重のもと、家族と同じ食事を摂取することが望ましく、3区分が効果的であると考え検討を行った結果、第1グループは一口大の料理品、第2グループは生で食べられる食品の一口大、またはつぶし・きざみ食で、比較的ゲル状に近い料理品、第3グループはミキサー食を含むゲル状料理品の3区分に分けることができた。

第V章「居宅療養高齢者の摂食機能に適応する食物形態区分を用いた栄養指導方法の検討」では、第IV章で得られた食物形態3区分を用いて、実際に居宅療養高齢者に対して訪問栄養指導を行い、その介入効果を検討した。その結果、身体計測、血液検査、QOLの結果より、有意な差は得られなかったものの、コントロール群よりも介入群の方が維持または改善されている者が多かった。居宅療養高齢者に対して、訪問栄養指導において、摂食機能に考慮した栄養指導方法を用いることは、高齢者の栄養状態を維持させる可能性が示唆された。また、栄養指導に調理指導を加えたことにより、要介護高齢者及び家族やヘルパー等介護者に対して、家庭で実践しやすくなったと考えられた。

第VI章では、以下の総括を示した。本論文によって居宅療養高齢者に対して、摂食機能に考慮した栄養指導方法を用いることは、高齢者の栄養状態を維持させる可能性が示唆された。また、その方法として栄養指導の中に、調理指導を加えることは、家庭で実践しやすいものとなり、居宅療養高齢者に対して効果的であると考えた。

以上要するに、居宅療養高齢者に対して、栄養管理士の立場から訪問栄養指導の場面において摂食機能に着目した調理指導の介入を行い、居宅療養高齢者の栄養状態を維持させることを示唆し、施設入所の高齢者の栄養状態と比較して居宅療養高齢者の栄養状態が悪化する状況の中で、管理栄養士の役割として訪問栄養指導を通じて居宅療養高齢者の栄養状態の維持・改善への課題を指摘した点で貴重な研究成果だと思う。よって、本論文は博士(学術)の学位論文として、十分価値あるものとして認められる。